

トウンリリミス
小説リライト
「魔女と王さま」(後章)

2023/07/14



エリー

目次

1章 ニニーとアララギ	1
2章 ニニーとモモ	3
3章 教育改革の始まり	6
4章 王都も動く	8
5章 ニニーとシブガキ	10
6章 村の成長	13
7章 バニラ王子、即位する	16
8章 国際留学と、ニニーの再決意	18
9章 「できない人」がやるべきこと	20
10章 さあ、未来へ	23

1章 ニニーとアララギ

バナラ王子とクミン王妃のいるエルメダーラ王国は、大陸の南に位置する。山を挟んだ北には、工業が盛んなルビマンダ共和国。南東には、グリーン教の聖地サンサリーンという観光立国の島国がある。ここが、クミン王妃の出身地だ。

ニニーが赴いた「辺境」は、エルメダーラ王国と、その北のルビマンダ共和国の国境となっている広い山岳地帯を指していた。二つの国は友好関係にあったが、山賊などの隠れ家になっていることも多く、魔法使いが空から巡回して警戒に当たっていた。

広くて静かな場所なので、引退した魔女や魔法使いも多く住んでいる。ニニーの目的の一つは彼らに会うこと。そして真の目的は、グリーンさまのために『新しい道』を作ること。それこそが、『約束の子ども』であるニニーの役割なのだから。

——人は神の細胞。神の一部。
——人が健やかなら神も健やか。
——人が病めば神も病む。

ニニーは、そんなことを呟いた。

——グリーンさまは、見守ってくれる。だから、自分がやるべきことに集中しよう。

ニニーはそう決意して、まずは、森を仕切る長老魔法使いのマジョラムに会いに行ったのだ。星明りを頼りに歩いていった小屋には、暖炉の火が燃えていた。

「魂は天上の物質で神そのもの。対して地上の物質である肉体に宿る精神は、人そのもの。神にとってよいことと、人が肉体から望むことは違っている。わかるかね？」

ニニーは少し考えた。小さな木の小屋で、マジョラムは質素に暮らしているようだった。満月同様に、月の光が強まる新月の晩。

魔法使いと魔女が語り合うには、絶好の機会だっただろう。

「肉体は生理的な快楽を求めて娯楽を好み、怠惰に過ごそうとします。対して魂は精神を鍛えて、意志を持ち、鍛練を求めます。肉体と魂、精神がどちらの影響を強く受けるか、

分かれ目はどこにあるのでしょうか。わたしはやりたい人だったので、怠惰にながれたことがないのです」

ほお。

感心するようにマジョラムが優しく微笑む。

「初歩の初歩は意識を集中すること。意識を操れず、野放しにしていると簡単に肉体的な生理に振り回される」

なるほど、と、納得したようにニニーは深くうなずいた。

「まず精神を内部認識と外部操作に分けます。インプットとアウトプット。そして、自分のなかに具体的な認識を持つ力を想像力。事実を知る力、環境を内部に構築する力です」
「ふむ」

「そして想像したものを肉体を通じて伝えたり、作ったりする操作能力を表現力。声の調子を整えて、言葉を選んで話すことも表現力なら、手足を動かして包丁を使って料理をすることも表現力」

意のままに操る操作系の意識の使い方だ。

「そしてそれらを続ける持続力が体力。想像力、表現力、体力の3つに注目して、子どもたちを育てていこうと考えています」

マジョラムは、返事をすぐにはしなかった。

これは、熟考しなければいけないと思ったのだ。隣に控えていた弟子の魔法使い・アララギに問いかける。

「アララギや。お前は、どう思う？」

「精神を想像力と表現力に分けて、肉体を体力としたのですな。わかりやすくいいとおもいます」

「ふむ。では、ニニーのことは、アララギが手伝うとよい。教育の洗礼を受けていない認識が統一される前の子どもに接することは学びになるだろう」

アララギは少し驚いたが、嬉しそうに頷いた。

ニニーもその様子を見て、声をかける。

「魔法使いアララギの科学知識を受け継ぐ力のある子どもを見つけたら、森に通わせませぬ」

「ええ、お待ちしております」

2章 ニニーとモモ

そうして、マジヨラムの家をでたニニーだが、少し歩いたところで、暗闇にうごめくものを見つけた。

なんだろう、と思ってみていると、小さな女の子が、箒に乗る訓練をしているのだ。しかし、いっこうに、ふわりとも浮かばない。それからため息をついて、ニニーを見る。

ニニー同様に、暗闇に自分以外がいたことに驚いたようだが、すぐに、視線は、ニニーの立派な箒にうつった。

「私の箒はボロボロだから、浮かないのかしら……」

小さく呟く女の子に、ニニーは微笑む。

「じゃあ、箒を交換しましょう」

「ま、魔女様。そんな、いいんですか？」

「ええ。どうぞ。私は、あなたの箒を使ってみるわね」

そうして、ニニーは、女の子——モモの箒を使って空高くまで飛び上がった。

「わあ、魔女様、すごい！」

「次は、あなたの番よ」

「えっと……。えい！」

モモは両足に力をこめるが、箒は少しも動かない。涙が出そうになった。ニニー様は、あんなに遠くまで飛んでいけているのに、と。

すぐ近くには、崖がある。

飛び降りてみれば、眠っていた力が目覚めるかもしれない！

モモはそう思って、崖のほうへと近寄った。

「ねえ、モモ。一応聞いておくけれど、落ちたら、村から出ることもできず、農奴の子どもとして、畑仕事で人生を終えるのよ？」

「平気です！ 自由を知らずに人生を終えるなら、死んだほうがマシなもの！」

そう言って、崖へと、飛び込んだ。

「えい！」

だが、モモの勇気もむなしく、その小さな体はグングンと落ちていくだけだ。

——私、本当に死んじゃうんだ……！

思わず目を閉じた瞬間、モモの体が、強い力で引っ張られた。目を開けると、ニニーが助けてくれて、崖の上まで連れて行ってくれたのだ。

地面には落ちた衝撃でバラバラになった箒の残骸が転がっていた。ニニーがいなければ箒と同じ運命をたどっていただろう。

「魔女さまは、どうして飛べるの？ 飛び方を教えて！」

崖にあがった途端、詰め寄られてニニーはうろたえた。さっきは死にそうになったのに、なんて立ち直りの早い子だろう、と思った。

「精神力で飛んでるらしいけれど、もともと、考えなくても飛べたから教えられないのよ……」

モモは、涙ぐんだ。それは悲しみの為というより、悔しさのためだっただろう。

「うーん……。そこまで悔しく思う根性があるなら、科学を覚えられるのではないかしら……。あなた、森の魔法使い・アララギの弟子にならない？」

「え……？」

モモは、目を丸くした。

「空を飛ばないと魔女にはなれないけど、知識を学ぶだけなら魔女でなくてもいいのよ。わたしが起こす村の教育改革で、才能あるものは村から出す。その覚悟は、あなたにある？」

ニニーの突然の言葉に、モモは、自分の人生が変わっていくような気がした。モモは、農奴の子どもだ。魔女になるしか、村を出る方法がなかった。

でも、才能のある子どもは、村から出ていい、とニニーは言ったのだ。

「死んでも、この世のすべてを知りたいです！」

「いいわね。でも、知識を得るだけではだめよ。知るだけなら、ただの娯楽。私が支援する理由がないわ」

「そう……ですね」

「つまり、私は、モモには、もっと先を求めているってこと。知識を得て、それを活用して、未来を作る。出来るわね？」

モモの顔が輝いた。

——私のことを、信じてくれる人がいるなんて！

この狭い村で、初めての事だった。

——始まりを、ありがとう。

モモは、そう感謝した。

同じく、ニニーも感謝した。

モモから溢れるエネルギーは、ニニーにとっても心地よいものだったのだ。

モモはみんなを照らす光になるために、新しい道を歩き始めたのだ。

3章 教育改革の始まり

村の広場で、ニニーが就任のあいさつを始めたのは、春のことだった。

「初めまして。私は、ニニー。私は、街に出て、お金を稼ぎ、村にお金をもたらしてくれる若者を育てようと思っています」

突然のニニーの宣言に、村人たちは驚いた顔をする。

二十歳になるニニーが、首席で学校を卒業したことは噂に聞いていた。だが、この村では、表面上は魔女を尊敬しているが、祈ればグリーンさまが救ってくれるという古い教えを信じている人が多いのだ。

だからこそ、ニニーは、最初にハッキリと、「自分たちで頑張りましょう」と伝えることにしたのだ。

村人のなかで、唯一顔が輝いているのは、モモだ。モモはすでに、ニニーがどんな人かを知っている。

「この村が貧しいのはなぜですか？ 現金収入がないからです。農作物を作ったり、木を育てたり、自給自足の暮らしをしても、足りないものはあります。買うためにはお金が必要ですよね」

「でも、ニニー様。一体どうしたらいいんでしょうか？」

村人のひとりが、そう尋ねてくる。まだニニーと同じくらいの青年だ。

質問してくるということは、やる気があるという事だろう。

ニニーは小さく頷いて、答えることにした。

「身分に関係なく、子どもたちに機会を与えます。自力で考えて行動できる子どもは、街に出て年間10万ミミの仕送りをしてもらいます。自由を、お金で買うのです」

「自由を……！」

村人、とくに若い子どもたちが、ざわめいた。

この変化を嫌う閉塞的な村では、「自由」は魅力的すぎる言葉だったのだ。

「で、でも、僕、そんなの出来るかな……」

もじもじしながら、内気そうな子供がそう告げる。

ニニーは、一人一人の顔をみつめて、諭すように続けた。

「街に行かない自由も認めます。村に残った子どもたちは、家族ではなく、村の子どもとして、街に出た子どもの代わりに村全体の手伝いをしましょう」

内気そうな子供は、ホッとした表情に変わった。

ニニーは、精神世界で、リリーと話したことを思い出した。
『自由を、自力で暮らせない人にまで認めたために、ガールズミスは衰退した』
『本来、自由は自力で勝ち取るものであり、与えるのは間違いだった』
その言葉を意識しながら作ったのが、今回の村の改造計画だ。

今、目の前には、色々な顔の村人がいる。
意欲に燃える気の強そうな子ども。
失敗を期待する冷やかな大人の視線。
成功を願う無邪気な人々の笑顔。
色んなものが交錯する広場で、締め言葉をニニーは告げた。
「教育改革の実験をこの村で行います。成功させて全国に広めていくためにも、みなさんに、協力していただきたいのです」
この春から、一緒に赴任してきたイイギリ、ウツギ、アーモンドは、そんなニニーを見つめていた。歯に衣着せぬ物言いが、ニニーらしい。

この村は、変わるだろうか？ それとも、失敗するだろうか。
ニニーの実験が、いよいよ始まったのだ。

4章 王都も動く

その頃、王都では、王子バナラが手紙を受け取っていた。

「バナラさまへ

辺境は土地が痩せていて作物がとれません。道も悪く、物が届かないのです。石ころばかりなのに、鍬や鋤も銅で弱く、なかなか開墾も行き届きません。鉄の技術者にきて欲しいところですね。

追伸。ニニーは、モモという子どもに懐かれてうまくやっています。

アーモンドより」

手紙を読んだバナラはがっくりした。ほとんどニニーの様子が分からないからだ。

その隣にいたクミンは、くすくすと笑っている。アーモンドらしい文章だ、と思ったのだ。アーモンドは昔から武芸は達人だが、文才はないとは、バナラ王子からはすでに聞いているところである。

「送る人選を間違えただろうか……」

「きっと、これからですよ。ニニーが元気そうだと分かったのですから、いいではありませんか」

「それもそうだな……。まずは、馬が通れる道を作るため、辺境に人を送ろう」

そうして、道路づくりが一気に進んだのだ。

バナラ王子が、王都の兵士を送ってくれるまで、道作りに携わるのは、ニニーとアーモンドだけだった。昼間の仕事が終わると、すぐに道の補修を始めるのだ。

「魔女といっても、箒で空が飛べるだけというのが悔しいわ！」

と、ニニーは、何度も言ったものだ。魔法ですべてを解決することはできないのだから。

「ニニー様。私も手伝います！」

途中からは、モモも手伝うようになってくれたが、道づくりは大変な作業だ。

だが、兵士たちが来てからはニニーたちは、別の仕事ができるようになった。

アーモンドは、「道づくりは順調」という手紙をバナラ王子には送ったが、そこにはニニーの様子は書かれておらず、王子が再度落胆したことは言うまでもない。

5章 ニニーとシブガキ

領主に挨拶に行ったのは、それからすぐのことだった。
「つまり実践させてふるいにかけて、できるものを活躍させるわけだね。面白い。わたしの息子も参加させよう」

賛成してくれたことにホッとするニニーの目の前に、いかにもやる気の無さそうな、領主の息子・シブガキが現れた。

シブガキの後ろには、警戒心の強そうな従者イバラが控えている。
「こちらは山奥の村で辺境使いをしている魔女ニニー。教育改革の実験をする。シブガキも参加しなさい。将来シブガキが治めることになる領土の村の実態を見てくるのだ。イバラも付き添ってくれるね？」

戸惑うシブガキを見て、従者イバラが助け船を出す。
「わたしがついていくのは構わないが、町育ちのシブガキは不便な田舎に行くことが嫌なのでは？」

シブガキも、同意するように、口を開きかける。
しかしそれより前に領主は威厳を持って言い諭した。
「だからこそ行く意味があるんだ。わかるな？」
さすがのシブガキも、父親には逆らえない。この父は、ただ息子を甘やかすだけの愚昧ではなかった。シブガキは頷いたが、憎々しげにニニーを睨んでいた。
——なんだか、荒れそうな気配ね。

ニニーはそう思いつつ、シブガキ・イバラと共に村へと帰っていくのだった。

村に来たシブガキは、想像通り、部屋に引きこもって、村の手伝いは一切しなかった。
従者イバラに、「なぜ叱らないのか」と聞いても、「失敗するくらいなら、何もしないほうがいい。神に祈って暮らしていた昔の方がいいさ」と答えるだけだった。

実はイバラは、元領主だった。

山を削って、畑を作ろうとしたが、山崩れを引き起こしてしまい、街をつぶしてしまったのだ。死者も出た責任を取って、イバラは、全財産を使い果たした。

そして、今の領主の居候として、シブガキの従者として迎えられたのだ。

すべてを諦めたイバラは、木彫りの人形を彫り続けている。それが何のためなのか、イバラは語ったことはない。

やがて、町に送る子どもの選別試験のために、森からアララギがやってきた。
道具と材料を使って、玩具を作るという試験だ。
シブガキは、従者イバラに貰った人形を、提出した。
ニニーはすぐに気づいたが、シブガキを咎めることはしなかった。
「嘘をついてでも街に行きたいなら、行かせてみたい」
シブガキも、玩具を出せば街に行けると分かっているのだ。初めて見せたやる気は尊重したい、と思ったのだった。

一方のモモは、苦戦していた。根性はある。何度、手が止まっても、諦めずにあがき続けている。知っていることが少ないだけなのだ、自分の知識を与えれば…….と思ひ、正式に、モモはアララギの弟子になることが決まったのだった。
沢山の子どもたちの人生を決定づけたこの試験は、のちの世にも、よく語り継がれている。

「未来でコンピューターというものができる。便利だが大半の人は仕組みを知らない。使えるが作れないし、直せない。だからネジとバネと歯車で作って直せる日用品を作り上げる必要がある。その大任をモモに任せる」
アララギは、モモを弟子にして最初に、そう言った。
この言葉の意味を、モモは最初、理解できなかつた。だが、お師匠様がそう言うならば、頑張らなくては、と素直にうなずいた。
素直さは、モモの美德の一つだ。

「それからね、考えてこたえにたどり着かないなら、過去に人々が出した結論を暗記しなさい。死んだ知識は変化しない。足し算、引き算、割り算、かけ算、文字、これらは死んでいる。でも、生きてる知識は変化する。文字で表される技術たちだ」
「知識が変化するんですか？ 答えは一つじゃないんですか？」
アララギの言葉に、モモが首をかしげる。壮年のアララギと、小さな女の子のモモには、頭三つ分もの身長差があった。
アララギは、藤椅子に座りながら、モモに丁寧に話し続ける。

「試行錯誤の歴史を経て出された経緯を自分一人の頭で考え抜いて追うことは天才にしかできない。モモは天才かい？」
「い、いえ！ 凡人です！」
「だったら、結果を暗記するだけでいい。まずは、そういうものと受け入れて、考えなくていい」
そうなんです、とモモは頷く。まずは、全部受け入れよう、とモモは思った。素直さが大事だと、モモは本能的に知っていたのだ。

「文字を覚えて、計算できるようになりなさい。他人と意思疎通するのに役立つから。そこから先の応用は本で学びなさい」

「本！ 私でも読めるようになるなんて！ 嬉しいです！」

「いまの時代、本は貴重品だからね。生きた知識が書いてある本は答えがひとつじゃない。なにを選ぶか、立場を決めなくてはならない。立場が人生を分けることもある。それでも、人生を賭けられますか？」

アララギの問いは、重大なものだった。モモの人生を変えるほどの威力のあるものだった。けれど、モモはひるまなかった。

「はい、この命を賭けて！」

アララギは、微笑む。

「夢を果たしたとき、暗記したことの意味を知るだろう」

やる気のある子どもを育てるのは、アララギにとっても嬉しいことだった。二人はそうして、師弟になったのだった。

6章 村の成長

変化には、時間が必要な時と、そうでない時がある。
そして、変化する人も、誰につくかで、大きく変わってくる。

その頃、アーモンドは、仕事が終わると毎日河原で体を鍛えていた。
やがて、一人の少年が隣にきて、黙ってアーモンドの真似をするようになった。
「村の子だよね。君も、体を鍛えたいのかい？」
「はい！ 俺、レンジャーになって山を見回りたいんです！」
なるほど、と頷き、アーモンドは、体を鍛え続ける。少年も、同じように体を動かす。
無言の子弟が、誕生したのだ。

村の財政管理を任されていたイイギリのもとには、小柄な少年が訪れた。
「何に使って、いくら売上、利益がどれだけでたか。いくら損したのか。状況を把握するためには記録を残すしかない。やり方を教えよう」
「は、はい！ お願いします！」
こちらは、言葉を使って指導することになった。小柄な少年は会計の技術を身に付け、イイギリの補佐へと成長していった。

ウツギは、うっかりした性格も大分直り、蒸留水から薬を作る仕事を任されていた。だが、今も、水汲みは、ウツギの仕事だ。
小遣い欲しさに寄ってくる子供たちに、バケツの洗い方を教え、きれいに水をくむ方法を教えた。
「1日手伝ったら、1ミミ。百日手伝ったら100ミミあげよう」
ウツギがそう言うと、一人の女の子が毎日通ってくるようになった。
少女の名前はワカメ。働き者の、可愛らしい人気者だった。

領主の息子で農作業をしたことがないシブガキは、泥まみれになることを嫌がった。
ところがある日、大雨で水汲み場が流されてしまったのだ。
「さて.....。どうしようかしらね.....」
村の運営責任者であるニニーは対策を求められたが、頭を悩ませていた。
材料の丸太を山から切り出すことはできる。だが、足場を組み立てる大工を雇う金がない。

「最初に街に送り出した子どもたちからの、支援金に期待するほかないでしょうね」

会計を担当していたイイギリが、そう告げる。

たしかに、それしか道はない。

一年が終わる12月31日。ニニーは、箒で街まで飛んだ。

「ニニー様！ 行ってらっしゃい！」

この一年で、背が高くなり、顔つきまで変わった子どもたちが、そう言って見送ってくれた。ニニーは、誇らしかった。目標が完遂したわけではない。だが、彼らは今、自力で成長しようとしているのだ。

村から街に送ったのは、三人だ。街で稼いで、十万ミミを村に収める、という理由で街に送ったのだが、それを支払えたのは、一人だけだった。

「がんばったわね」

ニニーがそうねぎらうと、支払えた子は、嬉しそうに笑った。

人懐っこくて、頭の回転が速そうな子だった。

「他の二人も、大丈夫よ。街でダメでも村に居場所があるから」

「ニニー様.....。でも、こんなじゃ、村に帰れません」

「何を言ってるの。堂々と帰ってきなさい。一年一人で暮らしたことに価値があるんだから。稼ぐすごさがわかるし、帰る場所である村の価値も分かったでしょう？」

それもそうか、と思って、残った二人もうなずいた。挑戦すれば、失敗することもある。でも、それは無駄なことではないのだ。二人はそのことを、心に刻んだのだった。

しかし、ニニーと、村の大人たちは困っていた。

子ども一人から回収した十万ミミでは、水汲み場を作り直すことはできない。

だが、ニニーたちの村の噂はすでに広まっており、別の村から、大工の一人が声をかけて来てくれた。

「有能な子どもを私の弟子にしてくれるなら、ただで直してやってもいいよ」

有名な魔女のニニーと、繋がりを持ちたいという意図もあったかもしれない。

あるいは、この村の子どもたちが、みな有能に育っているというのを聞いて、将来性を見出したのかもしれない。

「私、行きます！」

ニニーとアララギは、モモを推薦しようと思っていたが、その前に、モモが目を輝かせて宣言してきた。

「私は、アララギ様から、色々なことも学びました。次は大工の弟子となって、もっといろんなことを学んでみんなの役に立ちたいです」

「モモ、本当にいいのね？」

「はい！ ニニー様。私は、もっともっと、世界を知りたいんです！」

その輝く目に、ニニーは、幼いころの自分を見つけるのだった。

「ごめんなさいね。私はまた、モモについていくことはできないけど」

「何を言ってるんですか。ニニー様。ニニー様は、手も口も出さないけれど、側にいてくれる。それがどれだけ大変なことか、私にはもう分かるんです」

「モモ……」

「あなたならやれる」と思って待っていてくれるニニー様がいるから、私たちは、頑張れるんです！」

その言葉を聞いて、ニニーは昔の母との会話を思い出した。

母も、似たようなことを言っていなかっただろうか。そしてその考えは、グリーンさまへの考え方にも似ているのではないだろうか。

「そうね。グリーンさまも、見守ってくれている。みんな、自分がやるべきことを、やりましょう！」

おお！ と大きな声がした。

イイギリも、ウツギも、アーモンドも、弟子がいる。それぞれの師弟は、それぞれの仕事を行い、やがて、子どもたちの背丈が随分伸びた頃、村の水汲み場は、元通りになったのだ。いや、前よりも、もっと丈夫に。

7章 バニラ王子、即位する

時は経ち、バニラは30歳。ニニーは26歳となっていた。
はじめて二人が出会ってから、もう十年も経ったのだ。

「バニラ王子や。ワシは、そろそろ引退しようと思う」

「父上。それでは……」

「ああ。バニラ。お前が、次の王だ。クミンは、王妃となる」

父王の言葉に、バニラは息をのむ。

ようやく、この時が来たのだ、と思った。

「ワシの治世では、やり遂げられなかったことを、お前なら完遂できるだろう。なにしろ、お前は小さなころから利発だった。ワシと違ってな」

「父上、そんなことはないです。私は、父上の背中を見て育ってきたんですから」

「いいや、お前は賢い。覚えているか？」

街道を整備させて作物を流通させよう！

農具を改良して生産量をあげよう！

保存できる食べ物を開発しよう！

お前は何度も、ワシにそう言ってきた。だが、ワシは拒んだ。王は勝ち馬を見抜き金を流すだけでよい、と」

「そうですね……。そして私は、そんなのは卑怯だと言いました」

「個人が負けても再起できる。しかし国が破綻すれば難民になる。リスクを抑えて利益を最大にするのが王の役割だとさとしても、お前は聞かなくてな……」

王は、ふふっと笑った。このバニラ王子を慈しみ、丁寧に育ててきたことが分かる微笑みだった。

「父上。私は、あの時に己の浅はかさを知ったのです。特産品の杉の木を使って木彫りの小箱を作るアイデアを出して、側近たちも褒めてくれた」

「そうだったな」

「でもそれは、おべっかに過ぎなかったのです。あの木箱は、市場で一つも売れなかつ

たのですから。自分の計画が、簡単には進むはずがないことを、身をもって知らされました」

バナラ王子は、悔しそうな、あるいは懐かしそうな顔をする。

あの頃は、まだ若かったな、とバナラは思った。自分の計画したことは、すべて計画通りに進むと思っていたのだ。

「抱えた在庫は国の負債であり、国民の負担。そう父上に言われて、私は、父上が私以上に国を考えていたことも知ったのです。父上……。長い間、ありがとうございました……」

バナラ王子は、王の椅子に座る父のてのひらに、唇を近づける。

この国では、最敬礼にも近いものだった。

父王はその姿を見届けたあと、立ち上がった。

「さあ、バナラ！ 次はお前の番だ！ この国をより豊かにしてみせよ。出来ることをすべて行い、王としての務めを果たすのだ！」

そうして、バナラ王子も、また、新しい挑戦を始めることになっていったのだった。

この時期、ニニーの暮らす辺境の地でも、バナラの居城でも、沢山の変化が起きていた。のちの書物にも、彼らの動向は詳しく書かれている。だが、彼ら以外にも、名前のない人々が活躍していたことを、知っているのは、あたたかく見守り続けているグリーンさまだけかもしれない。

8章 国際留学と、ニニーの再決意

「みんな、聞いて！ バニラ王子……いえ、バニラ王が、国境を開いたわ！」

大工仕事から一時帰省していたモモが、そういつて町の集会場に飛び込んできた。

ニニーたち大人も、その弟子たちも一堂に会して食事をとっている時だった。普段は自分の家で食事をするが、時々集まって、情報交換を行うのだ。そのほうが、連携も取りやすい。

「なんだって。北のルビマンダ共和国との国境が？」

「ええ。あの国は、鉄製の道具を大量に生産しているでしょう。この国にも、農具を輸入すれば、畑も、もっと開墾できるようになる！」

モモの顔は輝いていた。その場にいた人々も同様だ。

「この村は、ルビマンダ共和国との国境だからな。人の行き来も活発になるだろうな」

「そうね。バニラ王は、道路網も完成させて、国中を馬が駆け抜けられるようにしたでしょう。そのおかげで、荷物もすぐに届くようになった。それが今度は、違う国に行けるなんて！」

ニニーも嬉しかった。この村を、もっと発展させられる。そして、ニニーの「本当の目的」に近づけられる！

「ねえ、モモ。私と一緒に、ルビマンダ共和国に行かない？」

「ニニー様、いいんですか！？」

「もちろん。モモは、科学技術者を目指しているでしょう。そのためにも、大工仕事を覚えきった今、新しいステップに進むべきだわ」

ニニーがウインクすると、その場にいた森の魔法使い・アララギも頷いた。

かつての弟子の国際留学を、応援しよう、というのだ。

「うん。モモなら行るよ」

「がんばっておいで」

口々に言われて、モモも照れたような顔になる。

「また、新しい世界を見れるのね……！」

嬉しそうに言うモモだったが、その気持ちは、ニニーも同じだ。なにしろ、今まで、ルビマンダ共和国に行ったことはないのだから。

それからは忙しかった。モモは、ルビマンダ共和国に国際留学するために、大工の師匠にお礼を言って、領主に旅費を出してもらうことになった。

そうして、港に行って、船に乗ったのだ。

「ニニー様。ごめんなさい。私も箒に乗れたら、船なんか使わないでいいのに」

「何を言ってるの。そんなことより、あれをご覧ください！」

ニニーが指をさした方角には、ルビマンダ共和国の港が見えた。その港の先に、真っ黒い煙を吐き出す蒸気機関車が見える。

「すごい！　なんて迫力……！」

モモはそう言って、口元を覆った。

「さすが、機械に強い国・ルビマンダ共和国ね……」

「ニニー様。世界は広いんですね。こんなすごい技術があるなんて……」

そこまで言って、ようやくモモは気づいた。

「アララギ様が言っていた、「未来で作られるコンピューター」も、確かに、夢じゃないですね。私、もっと、勉強しないと……！」

「モモは、蒸気機関で機織りする工業の整備技師として働くんでしょう？」

「はい。でも、初めての仕事です。上手くできるのか……」

「大丈夫よ。物事にはね、要になる部分がある。それは、簡単には知ることができないのだけれど、モモは、その要が分かっているわ」

そう言って、ニニーは、モモの前に片手を差し出した。まるで、握手をしましょう、というように。

「あなたを信頼しているわ。ルビマンダ共和国でも、諦めずに頑張りなさい」

「……！　はい、ニニー様！」

モモの背丈は、すでに、ニニーと同じくらいになっている。

もう、小さな子どもではないのだ。対等に扱われる、大役を担わされたものとして、モモは、ルビマンダ共和国でも、成功していくことになるのだった。

9章 「できない人」がやるべきこと

その頃、村でも大きな変化が起きていた。

村一番の問題児と言えば、もちろん、領主の息子のシブガキだ。そのシブガキが、変わろうとしていたのだ。

「お、おい。俺も手伝うよ」

きっかけは、水汲み場を直すという一大事件のときだった。

ウツギの弟子として水汲みを手伝っていたワカメに、シブガキが一目ぼれしたのだ。

「領主の息子として、泥臭い仕事なんて出来るか！」

と言っていたシブガキだったが、大人たちのフォローのおかげで、自分から進んで水汲みをするようになった。

「ねえ、シブガキ。私ね、挑戦する人が好きなの」

村で盛大な祭りが開かれたときに、ワカメはそう言った。

その言葉を聞いて、シブガキも悩んだ。

「今からでも、俺は頑張れるかな……。いや、今更、遅いかな……」

シブガキも、自分の実力が、父や大人たちに認められるものでないことは、理解していた。何をやっても続かないし、他の子どもたちより傲慢であることも知っていた。でも、どう直せばいいのかわからなかったのだ。

結局、王都に行って見聞を広めたいと、領主である父に直談判することになった。ニーは「今まで村で頑張ってこなかった子を、街に送るのはダメ。まずは、村で頑張ってから」と反対したが、領主としては、息子には成長してほしいと、送り出してしまった。

しかし、街に出たシブガキは、辛酸をなめることになる。お金を持っていたシブガキはすぐに目を付けられ、投資詐欺に遭ってしまったのだ。

「僕にお金を預けてくれたら、十倍にして返すよ」

そんな言葉に騙されて、すべてを失ってしまった。

「ニー様……。やっぱり、俺はダメだ。みんなと違って、ダメな奴なんだ」

「人と比べても意味がないでしょう。シブガキは、何かに意識を集中することができないの。だから、意図した結果を出すことができない」

「そんなこと分かってるよ！」

「分かってないから、結果だけ求めたくせに！」

優しく諭したのに怒鳴られて、ニニーも思わず、怒鳴り返してしまう。

大人げなかっただろうか、と思いながら、深呼吸する。ニニーは、シブガキに、大事なことを伝えることにしたのだ。

「シブガキ。このトゥンリリミスは、パラレルワールドの中でも、後からできた世界なの」

「え……？」

「先に生まれた別の世界、つまり、失敗した世界の結果を知っている。いわば何度もやり直した結論が詰まっている新しい世界なのよ。だから、ここでいう言葉は、素直に聞いたほうがいいわ」

「ちょ、ちょっと。どういうこと？」

突然話が大きくなってシブガキは困惑する。

これは、腰を据えて話さなくては、と、ニニーは座り直した。

「グリーン教は知っているわね？」

「もちろん！ 昔の僧侶は、「グリーンさまは祈れば救ってくれる」と言った。でも、本当はそうじゃないって、ニニー様のおじいさまのマグノリア様が教えてくれたんだ」

「そうよ。かつては、人は、知らないことだらけで、不安と恐怖に包まれた赤子だった」

「おれのように？」

意外と自分を客観視できているな、とニニーは苦笑してしまう。

シブガキは、もしかしたら自己否定の塊なのかもしれない、と少し可哀そうになる。

「まあね。でも、赤ん坊もやがて、知識を得て、神の限界を知り、自分の方が上だと誇るようになった。でもどうにもならないことはあって、守られていた子供の頃がなつかしくなる時もある……」

「分かるよ。俺もそうだもの。でも、戻ることはできないでしょう」

「そうね。だからマグノリア流のグリーン教が広まり、やがて、過去には神が庇護してた人々を、人が庇護するようになったの。だからわたしがシブガキに段階とぼして結果だけ求めてもだめだと言っているわけ。人と比べないで、自分に必要なことをしないと」

そう言われて、シブガキは、うつむいた。

「俺に、できることなんて、あるのかな」

「あるわ。シブガキはね、「分からない人」と「できない人」の気持ち分かるでしょう？」

「そりゃあ、そうだよ。俺の人生、そればかりだもん」

「わたしはね、優秀だったのよ」

いきなりそう言ったニニーに、シブガキは「自慢？」と聞きそうになったが、勿論、口には出さなかった。ニニーの声が深刻で、後悔も見えた体。

「だから昔は、考えてもわからない人に教える気がなくて、許すこともできなくて、部下を失いそうになったことがあるの。でもシブガキは、そんな人にも優しくなれる」

「そう……かな」

「ええ。妬んで他人の邪魔をしないと、見栄を張らないとか、素直になるとか。技術面を伸ばすのは、きっとモモがしてくれるわ。だからシブガキは、感情面をサポートしたら？ 失敗談や悩んだ話は年下に受けるからね」

ええー、とシブガキが嫌そうな声を出す。

「そんなかっこわるいことできないよ！」

「でも、今生の課題が一つも終わらず魂が育たないまま死んだら、来世も同じ問題を起こすのよ。なら、今生で恥をかいて、できることを増やして来世ではそれを生かしたいじゃない？」

「グリーンさまのために？」

「グリーンさまは、わたしたち自身でもあるから、自分のためにでしょ？」

「自分は何もできないのに、自分よりすごい人を認めるのは辛いよ」

「本当になにもできないのかな。あなたにも、出来ていることはあるのでは？」

そう聞かれて、シブガキは考える。

大きな失敗をして、一人、木を彫り続けている従者のイバラ。

国際留学をして、活躍し、金貸しなどにも認められているモモ。

体を鍛えたり、会計を学んだり、魔法使いの弟子になったりした村の子どもたち。

「みんな、すごいなあ……」

「それよ！ 誰かを褒める人って、大事なのよ。あなたは、周りを褒めて育てる人になればいいわ」

そう言われて、シブガキは目を見張った。

自分には、何もできないと思っていた。でも、違うかもしれない。領主の父のように、魔法のニニーのように、王様のバナラのように出来ないかもしれない。それでも、誰かを育てることはできるのだ。

それは、シブガキに、初めての自信が宿った瞬間だった。そしてシブガキが、大きく育ち始める、キッカケであった。

10章 さあ、未来へ

時は流れ、バナラとニニーが出会ってから、三十年が経った。
バナラ王は五十歳。ニニーは四十六歳になっていた。

かつて、ニニーを見かけた城のテラスから、バナラは庭を見つめていた。
もうすぐ五十歳の誕生日で、盛大な祝賀が開かれる。
「だが、ニニーは来ないだろうなあ……」
バナラのつぶやきに、王妃であるクミンは微笑んだ。
「ニニーは、自由な鳥ですから」
「そうだ。だが、もう一度くらいは、会っておきたいと思ってな」
「それなら、国を変えるアイデアをニニーに聞いてみては？」
「どういふことだ、クミン？」

クミンは、息子夫婦にうまれた孫のために編んでいた靴下を完成させて、バナラ王の隣へと立つ。
「ニニーが、考えなしに辺境の地に行ったとは思えませんもの。この国、あるいはこの世界を変えるために行動したのではないかしら。ならば、それがどんなアイデアだったのか、聞いてみたいと思いませんか？」
「たしかに……。だが、ニニーの言葉を優先したら、エコ最良ではないか。為政者である王としては、あつてはならぬことだ……」
「では、広く国民すべてにアイデアを募集しましょう。そうして、ニニーのアイデアが素晴らしかったら、王宮に呼んで話を聞けばいいわ。私は、ニニーなら、素晴らしい案を持ってくると信じていますがね」

バナラは、「私も同じだ。ニニーを信じている！」と言いたかったが、妻の前なので、遠慮することにした。そうして、国民に広く募集することになったが、その多くは、

「貧困対策にお金を配る」

などだった。それだけでは、成長がないと不満に思っていると、一つだけ、目についた案があった。

「大人が子どもの客になり、体験させて学ばせる教育改革」

差出人を見ると……。それは、ニニーだった。

「やはり、ニニー。君は、素晴らしい」

バナラ王は、一人きりの居室で、そう呟いた。

三十年も会っていないのに、ニニーの声が、今も耳に残っている。

「この国、この世界のために、私たちは頑張った。そうだな？」

答えはなかった。だが、なんとと言われるか、バナラは知っていたのかもしれない。

やがて、王の五十歳の祝賀披露宴が開かれた。

ニニーは、モモやシブガキを連れて参列した。子どもたちには、新しい経験を沢山してほしかったのだ。アーモンドも付いてきた。久しぶりに再会した主従は、お互いの健闘を祝いあったものだ。

「ニニー。サンサーリンの焼き菓子があるわよ」

王の居室に案内されたニニーは、そうクミン王妃に声をかけられた。

口元にも目元にもシワができていたが、クミン王妃は、今も変わらず穏やかで、礼儀正しく、芯の通った人だった。

「まあ。嬉しい。母の家で、食べたきりだわ」

ニニーも、そう言って椅子に座った。家に帰省して、母の亡骸を見つけた日。結局、用意されていた焼き菓子の道具はどうしたのか、ニニーは覚えていない。今は亡き叔父のゲウムが、片付けてくれたのかもしれない。

「食べながら、これまでニニーが何をしてきたのか、詳しく話しておくれ。時間はたっぷりあってあるから」

バナラ王も、年老いた声でそう言って、微笑んでくれた。

ニニーは今までのことを話しながら、段々と、自分が16歳の時の気持ちに戻っていることに気づいた。

母に禁じられていたのに箒に乗ってしまったこと。

教えなかったせいで、ウツギが鞭うたれたこと。

歌手をあきらめて、魔女になる決断をしたこと。

エンジュに蒸留水の作り方を教わったこと。

バナラ王子とクミン王女と出会ったこと。

辺境の町に行き、改革を行ったこと。

そのすべてが、ニニーにとって、とても大事な思い出だった。そして同時に、この国、この世界にとっても、『新しい道』だった。

バナラもクミンも、ずっと応援していたことは言わなかった。王族の好意は、命令になりかねないからだ。二人とも、ニニーには自由な鳥でいて欲しかった。

バナラは思慮深そうに話し出す。

「大臣の中には、教育改革に、反対しているものもいる」

ニニーは承知している、とばかりにうなずいた。

「自由は自活したものが金で買う権利。身分をこえて、平等に機会を与えましょう」

「そうですね。グリーンさまにも、重責を負わせないように。自分たちで生きていきましょう」

バナラ王子も、クミン王妃も、ニニーも微笑む。

この世界の名前は、『ガールナルミス』。意味は原点神話。

最後尾は『トゥンリリミス』と呼ばれるまだ電気も蒸気機関車もない世界。

そして最先端は……、わたしたちが暮らす 21 世紀なのだ。

私たちは、神の細胞の一部として、今も生きている。

「ええ。競争のスタートラインに立てないものは、私たちが、教え導き守ります。どんな生き方をえらぶか……。それを決めるのは、あなたです」

そうして、世界の扉は開かれたのだった。

トゥンリリミス TRPG すごろく「村の再生」に進む。

トゥンリリス小説リライト「魔女と王さま」(後章)

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
